

教科書双書 *The Music Hour* (1927-1931) の 音楽鑑賞教育

— 1920年代の米国初等音楽教科書との比較を通じて —

武内裕明

(2008年10月2日受理)

Music Appreciation Education of *The Music Hour*:
Through the Comparison with American Elementary Music Textbooks of the 1920s

Hiroaki Takeuchi

Abstract: This paper compares the music appreciation education of *The Music Hour* with other elementary music textbooks of the 1920s in the United States. The focus is on the difference between the terms appreciation and listening. The term appreciation had no definite meaning at that time at the elementary school level. Due to the obscurity of this term, it was difficult to determine what should be done in a course in music appreciation. The distinction between appreciation and listening is indispensable in order to design the content of such a course. Music textbooks of the 1920s could not define the relationship between appreciation and listening. *The Music Hour* was the first music textbook to do so. The structure of music education in *The Music Hour* is clearly shown: appreciation is the general objective of music education, and music education is organized into two courses: one in singing, and one in appreciation, which consists of quiet listening and other activities.

Key words: music appreciation, listening lessons, music textbooks, United States

キーワード：音楽鑑賞，聴取の授業，音楽教科書，米国

1. 問題の所在

音楽鑑賞力育成は、19世紀末に米国の学校音楽教育の重要な目的として掲げられはじめ、学校教育では良い音楽を愛好し、理解する能力の獲得がめざされることとなった。これは、地域での歌唱活動に必要な読譜力育成に重点を置いた従来の唱歌科の目標とは大きく異なる。学校音楽教育は、地域での歌唱のための教育

から音楽聴取者のための教育へと移行しようとしていたのである。音楽鑑賞教育はコンサート興行の普及や音楽再生装置の発達に伴い、音楽聴取者育成のための教育として聴取の授業の形で徐々に学校教育に導入されることとなった。このような機運は大学の公開講座などから徐々に下方へと教育期間を拡大していく。初等学校における音楽鑑賞教育の体制が整えられることは、音楽鑑賞力育成という目的を初等学校段階から実現しようとしたことの明確な指標であった。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：三村真弓（主任指導教員）、池野範男、
古賀一博、千葉潤之介

ところが、「鑑賞（Appreciation）」という言葉は、米国の音楽教育の歴史上でも有数の難解な言葉となっている。そのため、初等学校に音楽鑑賞教育が導入された後も、音楽鑑賞教育をいかなるものとして構想す

べきかが明確になるにはなお時間を要したのである。その原因は、音楽教育で育成されるべき目的としての鑑賞力と、科目や領域としての鑑賞が同じ言葉で表現されていたことにある。後者は、1910年代には「聴取の授業 (Listening Lessons)」として同定されることとなった¹⁾と考えられている。音楽鑑賞が科目として独立して存在した中等教育では、Birge のこの指摘は妥当であった。

聴取の授業とは、音楽の聴取に関わる全ての授業を意味するものではない。この言葉は、主として蓄音機などの音楽再生メディアなどを通じて音楽を聴取するなかで、音楽の聴き方を学習する授業を意味する特殊な言葉であった²⁾。

しかし、初等学校では中等教育とは事情が異なっている。初等学校においては、唱歌科から音楽科への転換期にあたる1920年代に教育内容も量的拡大をするが、リズム反応のような従来の歌唱に取まりきらない活動は新たに加わった鑑賞の領域で行なわれることになった。そのため、鑑賞力育成に資するあらゆる活動が音楽鑑賞の授業として認識されかねなかった。さらに、1920年代の初等学校用音楽教科書には聴取の授業という言葉も見られるが、この言葉は音楽の聴取と関係する活動一般が音楽鑑賞の授業に含まれるとの誤解を招きかねなかった。

上述した鑑賞という言葉と聴取の授業という言葉の混同がもたらす混乱は、初等学校において鑑賞と聴取の厳密な使い分けを不可能にしていた。しかし、鑑賞力育成という目的と聴取の授業とが明確に区別されることなくしては、授業としての音楽鑑賞が何を意味するのかは曖昧なままである。そのため、本稿では1920年代の初等学校用音楽教科書において鑑賞と聴取が使い分けられるようになる過程を追う。鑑賞と聴取の明確な区分が成立することは、音楽鑑賞教育の歴史上極めて重要な意義をもつ。従来の研究では音楽鑑賞運動を広範に扱うか、鑑賞と呼ばれている内容を聴取の側面に限定するかのいずれかの立場から研究が行なわれており、初等学校の音楽鑑賞教育が鑑賞という言葉の使用に起因する不明確さから脱却していく過程は見過ごされてきたのである。現在では米国をはじめとして、鑑賞という領域設定は一般的ではなく、聴取と評価 (appraising) という独立した目標が設定されることが一般的である。この時期の鑑賞と聴取の使い分けは、米国の音楽鑑賞教育の転換点と理解できる。

米国の初等学校用音楽教科書において、初めて音楽鑑賞力の育成を音楽科教育の目的として中心に据えたのは *The Progressive Music Series* (1914-1916) であった³⁾。 *The Progressive Music Series* では音楽鑑賞の

リキュラムは具体的に提示されていないものの、器楽作品の聴取などの必要性が指摘され、鑑賞力育成という新しい方向性が提示された。1920年代に出版を開始した主要な音楽教科書には、*The Universal School Music Series* (1923-1925) や *Music Education Series* (1923-1927)、*Foresman Books of Songs* (1925-1931)、*The Music Hour* (1927-1931) がある。

とりわけ本稿では *The Music Hour* に着目する。それは、*The Music Hour* が米国の初等学校用音楽教科書としては初めて、鑑賞と聴取の授業の枠組みを明確に整理したと考えられるためである。*The Music Hour* に関する先行研究では、Dunham (1961) が音楽鑑賞を初等学校音楽科に統合したものと見なしている一方で、Sanz (1993) は歌唱、聴取、演奏、リズム、創造的表現の5領域の活動からなる音楽教育のアプローチの始まりである、と見なしている。しかし、Dunham は音楽鑑賞教育の発展の視点からは、教科書に作曲家、楽器、演奏家の写真が掲載された点以外には特別な変化を認めていない。*The Music Hour* は学校音楽への音楽鑑賞教育の浸透の成果と見なせるとはいえ、とりたてて注目されてはいないのである。一方で Sanz は、5領域の活動からなるアプローチの嚆矢として *The Music Hour* を理解する。Sanz は聴取という着眼点から *The Music Hour* を分析するために、*The Music Hour* の活動の中で主として静かな聴取 (Quiet Listening) を中心に分析を加えているが、音楽鑑賞と静かな聴取との関係性には着目していない。そのため、初等学校に音楽鑑賞教育が受容される過程における1つの転換点としての *The Music Hour* の音楽鑑賞に関する教育課程の特色は、先行研究で十分に明らかにされているとはいえない。

本稿では、1920年代の音楽教科書の指導書を通じてそれぞれの教科書双書における音楽鑑賞の扱いを概観した上で、*The Music Hour* の音楽教育観と音楽鑑賞の教育課程の枠組みを概観し、その特徴を指摘する。これらを通じて、*The Music Hour* の音楽鑑賞の教育課程において鑑賞と聴取が明確に使い分けられたことを明らかにすることを本稿の目的とする。

2. 1920年代の音楽教科書における音楽鑑賞

1920年代の主要な教科書双書は、総じて音楽鑑賞力育成を学校音楽教育の主要な目的としている。しかしながら、鑑賞の語が何を意味し、いかなる手段で鑑賞力を育成しようとしていたかは教科書双書によって立場が異なっている。また聴取の語が鑑賞とは別に用い

られていた場合にも、その用語法に明確な区別があったかは検討を要する。

ここでは、*The Music Hour* を除いた1920年代の音楽教科書において音楽鑑賞がいかに扱われたかを簡潔に示す。

2.1 *The Universal School Music Series* における音楽鑑賞

The Universal School Music Series では、音楽科は歌唱と聴取の授業で構成されている。「我々はこの双書全体を通じて、一般的目標としての「音楽鑑賞力」を伴う歌唱と聴取の授業を強調している」⁴⁾ というように、歌唱と聴取の授業双方を通じて、音楽鑑賞力育成がめざされていた。聴取の授業に関しては、*Teacher's Book* の第3部で「音楽鑑賞の授業」として、各学年10回分の音楽鑑賞の授業案が提供されている。第3部は、Rhett, E. M. と Glenn, M. という当時の音楽鑑賞教育の主導的人物たちによって執筆されている。

この教科書では聴取の授業の重要性を強調しているにも関わらず、聴取の授業の構想は一貫性を欠いている。そのため教育課程において聴取の授業が重視されているのかは疑わざるを得ない。聴取の授業は週1回が適当であると考えられていたが、第6学年までに関しては週案において聴取の授業の出現は週1回に満たず、教育内容も歌唱に従属した扱いであった⁵⁾。更にこの日案は第3部とも対応しておらず、例えば日案では第7-8学年で計画されている金管楽器の学習は、第3部では金管楽器は第5学年の学習内容となっている⁶⁾。

鑑賞と聴取の授業の使い分けであるが、教科書双書の著者は、鑑賞を一般的目標としており、聴取の授業は、子ども自身の演奏で通常得られる以上の音楽経験を与えるものであり、音楽の偉大な名作を知る手段であると考えている⁷⁾。しかし、著者たち自身は子どもたちによる歌唱を聴取することも聴取の授業に含めている⁸⁾。さらに具体的な授業案を提案した第3部は、音楽鑑賞の授業という名称であり、リズム発達や他の芸術領域との相互関連、音楽の劇化、といった静かな聴取の範囲を超えた内容を包括しており、教科書を通じて鑑賞と聴取の一貫した使い分けがなされているとはいえない。

2.2 *Music Education Series* における音楽鑑賞

Music Education Series では、「音楽鑑賞、すなわち良い音楽の理解と享受は学校における音楽教育の目標である」⁹⁾ として、音楽鑑賞は音楽科の目標として理解されている。音楽鑑賞領域に関しては教師用の鑑賞指導書 *Music Appreciation in the Schoolroom* で詳細な計画が提示されている。音楽鑑賞の時間には、音楽の授業の2回に1回の1部分か、週1, 2日が割り

当てられる¹⁰⁾ と考えられていた。多くの授業では1回につき1曲が学習され、1回の授業計画の中で、楽器、リズム、旋律、和声、などの複数の観点から学習曲が扱われている。この教科書で採用された指導法は、同時代に普及していた鑑賞教授法と比べて特異なものであった。

音楽鑑賞力育成という目標の達成は、音楽鑑賞の課程 (Course in Music Appreciation) によってめざされるのであるが、各学年の教科書を通じた、すなわち歌唱を通じたものと、蓄音機レコードと教師用の手引書によるものが並列しており、両者は区別されていない¹¹⁾。この課程は音楽を鑑賞するために聴き方を教えるものであったが、聴取の授業としてのものも、歌唱の授業を通じたものも同じく音楽鑑賞の課程であり、鑑賞と聴取は使い分けられていない¹²⁾。また、授業の週案を提案した指導書である *Outlines* では各学年の目標が示されており、聴取の課程による目標は歌唱の課程によるものと分けられている。しかし、この聴取の課程にはリズム反応のような活動が含まれており、鑑賞と聴取を意図的に使い分けているとはいえない¹³⁾。

2.3 *Foresman Books of Songs* における音楽鑑賞

Foresman Books of Songs では、「学校の音楽教授の主要な目的の1つは音楽を鑑賞する能力を発達させることである」¹⁴⁾ として、音楽鑑賞力育成を音楽科の目的として認めている。

しかし、この教科書では歌唱を通じた音楽鑑賞力育成を主張し、鑑賞のために必要な能力をどのように育成するかの示唆を与えているものの、聴取の授業としての鑑賞、あるいは聴取という言葉は登場しない¹⁵⁾。従って、聴取の授業としての鑑賞の授業は計画されていないといえる。

3. *The Music Hour* における音楽鑑賞

3.1 *The Music Hour* の音楽教育観

The Music Hour では、1) 音楽が子どもを幸せにし、美に対して敏感にすると同時に、社会化の力として環境に対して子どもが共感的に順応することを可能にすること、2) その教材や学習計画によって、教師や両親が子どもの潜在能力や興味を発見する機会を、また、子どもが自分を音楽的であると発見する探求の機会を提供すること、3) この組織された経験が、子どもの最終的な音楽との関係の整備に関して、余暇の、文化的な、趣味の、職業上の導きとしての役割を果たすこととなる影響力をうち立てること¹⁶⁾、の3点が主要な目的として掲げられている。個別具体的な目標は実際には従来の音楽科のものから大きく変更された

は見なせないものの、目的として音楽を用いた子どもの社会化や、能力開発、音楽の生活上の価値が最重視されている点は、1920年代の他の初等学校音楽教科書に比べて顕著である。

音楽鑑賞力育成が音楽教育の主要な目的として明確に言及されなかったことは、19世紀末以来音楽科の主要な目的としてその影響力を増してきた音楽鑑賞力育成という目的の衰退の始まりとも理解しうる重要な変化であった。先に概観したように、音楽鑑賞力育成は1920年代の初等学校音楽教科書で主要理念として掲げられていた。それに対して、*The Music Hour* では、子どもに対して音楽がどのように働きかけられることができるか、という観点の方がより強く打ち出されている。

一方で、教科内部の目標は1920年代と大きく変わらず、音楽鑑賞力育成は音楽科の中心的目標として機能している。

The Music Hour 全体を通じて、「すべての音楽の授業は音楽鑑賞の授業であるべきである」という見解は変わることなく強調されている。最も専門的な話題でさえ、音楽の美しさとの密接な関係を意識することで、それが示されたものへ向かって活気づけられるべきである¹⁷⁾。

このように鑑賞力育成という目標が音楽の授業の基底にあることが言明されているとはいえ、この教科書ではその目標はあくまで背景へと退いている。代わって前面に出るのが多様な活動領域である。音楽鑑賞力育成が音楽科の諸活動を統合する目的として機能しているために、授業は主として歌唱と鑑賞の2つの教育課程で構成されているものの、鑑賞の教育課程の内部は多様な活動領域で区分されている。すなわち、「今日、音楽鑑賞は従来主として強調されてきた「聴取の授業」よりも、一層包括的な学習として認識されている」¹⁸⁾のであった。歌唱の教育課程は音楽鑑賞の教育課程に含まれておらず、初等学校の音楽科の核としての位置づけを保っていた。一方、身体教育と相互関連したリズム発達プログラム、器楽音楽と相関のある学習、文学、歴史、地理、芸術といった並行する学習領域と相互関連する音楽の教材、などを含む多様な内容の音楽鑑賞の教育課程が提供された¹⁹⁾。

The Music Hour では、音楽鑑賞の教育課程は時間的に独立した課程とは見なされていない。音楽鑑賞の教育課程はすべての音楽活動と一体化したものであり、音楽科の別個の構成要素とは考えられなかった²⁰⁾。これは従来一般的であった、音楽鑑賞の教育課程は独立した課程であるという見解とは大きく異なっ

ている。1930年に MSNC (Music Supervisors National Conference) 音楽鑑賞委員会の「初等学校の音楽鑑賞 (Music Appreciation for the First Six Grades)」小委員会が提出した音楽鑑賞教育課程案、及び多くの初等学校音楽鑑賞指導書では、初等学校の音楽科の授業のうち週1回程度、独立した音楽鑑賞の授業を行うことを提案していた²¹⁾。鑑賞が独立した時間としてとらえられなくなったのは、当時の学校教育で強調されたカリキュラムの統合に歩調を合わせたためであった²²⁾。結果として、音楽と関わる子どもの様々な活動を下位区分として鑑賞という視点から教育課程が分節されることで、鑑賞の教育内容が定められている。

3.2 *The Music Hour* の音楽鑑賞の教育課程の枠組み

The Music Hour の音楽教育は、表1のように歌唱と鑑賞の2領域で構成されている²³⁾。加えて、低学年に関しては、リズム遊びとおもちゃのオーケストラが独自の領域ともいえる位置を占めている。このことはこれらの活動の目的が音楽鑑賞力育成という目的と完全には一致しないことを示している。しかし、これらの領域は後に鑑賞領域に配置されるばかりでなく、鑑賞領域でも最初からその構成要素として言及されている。表2は音楽鑑賞領域を教育する方法に関する項目であるが、実際に音楽鑑賞の教育課程はリズム遊びやおもちゃのオーケストラの領域を包含している。

表1 *The Music Hour* における音楽科の領域

幼稚園-第1学年	第2-3学年	第4-5学年	第6学年
歌唱	歌唱	歌唱	歌唱
リズム遊び	リズム遊び	音楽鑑賞と相互関連	音楽鑑賞と相互関連
おもちゃのオーケストラ	音楽鑑賞		
音楽鑑賞			

(*The Music Hour in the Kindergarten and First Grade*, pp. 185-197, *The Music Hour Elementary Teacher's Book*, pp. 64-80, *The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, pp. 63-70, 93-96, *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, pp. 91-99より作成)

表2 音楽鑑賞の教育課程の項目

幼稚園-第1学年	第2-3学年	第4-5学年	第6学年
歌唱	美しい歌の美しい歌唱	美しい歌の美しい歌唱	歌唱
リズム遊び	リズムへの身体的反応	社会プログラム	社会科
おもちゃのオーケストラ	音楽の雰囲気への反応	大作作曲家	リズムプログラム
聴取	音楽の構造の認知	楽器	絵画
	おもちゃのオーケストラへの参加	絵画	詩
	オーケストラの効果の経験	文学	大作作曲家
	絵の学習	リズムプログラム	楽器
	標準的作品の知識	聴取	聴取

(*The Music Hour in the Kindergarten and First Grade*, p. 188, *The Music Hour Elementary Teacher's Book*, p. 13, *The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, pp. 35-38, *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, pp. 65-67より作成。ただし、項目は指導書に掲載されたままの順序である。)

このような混同が生じているのは、*The Music Hour* では領域をどのように編成するかに関する一貫した基準がなかったためであった。歌唱領域については、第3学年までが教材の種類（暗唱歌、オブザーベーション・ソングなど）による分類、第4学年からは学習内容による分類（音、音価、理論）を採用している一方で、鑑賞領域は学習活動による分類を行っていた。そのため、特殊な活動としての上述の2つの領域は、鑑賞教育の活動としても鑑賞領域に配置されたのである。

音楽鑑賞の教育課程は、大まかに分類すると、美しい歌唱、リズム、社会科プログラム、楽器に関する学習、他の芸術との相互関連、大作曲家、聴取、から構成されている。歌唱が必ず筆頭に来ること、2番目に第3学年までリズム、第4学年以降は社会科との相互関連がくることは、それぞれの学年で強調されるトピックであったことを示していると考えられる。また、聴取に関連する項目は最後に記されている。しかし、その他の項目は、音楽鑑賞教育で行なわれる活動の多様性を表しているものの、その登場順に特段の順序性は見られない。読譜や創造的表現の位置づけこそ明確に規定されていないものの、*The Music Hour* では、ほとんどの活動が音楽鑑賞の教育課程に含まれている。読譜や創造的表現が音楽鑑賞の教育課程に含まれていないのは、それが従来の歌唱領域、すなわち読譜指導に関する分野であったためであろう。*The Music Hour* の創造的表現は、主題の書き取りや、旋律の創作が主要なものであった。また音楽鑑賞は聴取者の教育であるという考えは一般的であり、ニューイングランド教育連盟が高等学校の音楽鑑賞の教育課程を規定したときから、音楽鑑賞の課程では演奏能力や読譜能力が要求されていなかった²⁴⁾ ことも、*The Music Hour* において読譜の関連領域が音楽鑑賞に積極的に含まれていない背景であるといえよう²⁵⁾。

The Music Hour の音楽鑑賞の教育課程の項目によって明確にされたのは、初等学校の音楽鑑賞領域は聴取の授業と同列に扱うことのできないほど多様な経路を通じて教育されるべきものとして考えられていたことである。音楽鑑賞という領域は、ほとんどの音楽活動に付随する教育であり、その領域の1つとして聴取が存在していることを明確化することで、*The Music Hour* は音楽鑑賞教育の混乱した概念を整理したのである。

3.3 *The Music Hour* の音楽鑑賞教育の特徴

3.3.1 音楽鑑賞の教育課程の学習内容

音楽鑑賞プログラムはトピック的な項目の集合体であるが、第4-5学年用の指導書に提示された学習内容による分類を通じて、音楽鑑賞の教育課程の学習内

表3 *The Music Hour* 第4-5学年の鑑賞の学習内容と教材

学習内容	教材
雰囲気	様々な雰囲気を表す歌曲と器楽曲
リズム	民謡や愛唱歌、その国の器楽曲
旋律	民謡、クラシックの標準的なセレクション、現代の一流の作曲家による歌曲
形式	舞曲の形式と同じ形式の歌曲、及び歌曲形式の歌曲
楽器	絵、(教科書に掲載された器楽曲の) 主題、聴取の授業
声質	録音された教材
和声	歌の伴奏、聴取の授業、様々な活動と関連する音楽、声の混合、合唱
民族性	様々な人々の歌曲、舞曲、器楽曲、民族音楽、及びそれを受け継いだ作曲家の音楽
大作曲家	作曲家の特徴を表した歌曲、及び器楽曲、作曲家の肖像画
様式	歌唱教材、及び聴取教材

(*The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, pp. 34-35より作成。ただし■は専ら聴取を通じて学習される項目を示しており、筆者による。)

容を知ることができる。その内容を表3に示す。

表3で確認できるように、楽器と声質の2つの学習内容を除いては、すべてに歌唱教材が関係している。また、Dunham が指摘しているように、音楽鑑賞教育の学習内容は従来の音楽鑑賞指導書などで計画されたものから変化していない。

上述の学習内容のうち、楽器の音色や声質の学習は、それを実際に提示するために蓄音機等の補助が必要とされるので専ら聴取の授業で扱う内容であった。また、リズムは低学年から自由表現や劇化などの身体的反応を通じて適切に教えられる領域として、器楽曲を題材としながらも独自の位置を占めていた。しかし、*The Music Hour* では、音楽鑑賞の教育課程の学習内容のほとんどは歌唱を基礎として、更にいえば歌唱を中心として指導が計画されていた。鑑賞領域の大部分も歌唱という活動を通じて学習されるのである。

一例として、1921年に MSNC 教育審議会が提出した音楽の標準的教育課程において、鑑賞に関連してもっとも強調されていた内容である構造やデザインの学習を取り上げる²⁶⁾。音楽のデザインの学習については、*The Music Hour* でも章を割いてその教授法を示している。歌曲の学習では、第1学年から聴覚的オブザーベーションを通じて歌曲の楽句や音の関係の学習が開始される²⁷⁾。そして、音形、動機、楽句、楽節までさまざまな水準での楽曲分析が意図されている²⁸⁾。一方で、器楽曲のデザインについては、第4-5学年で舞曲形式、第6学年で、主題と変奏、ロンド形式が学習される²⁹⁾。しかし、器楽のセレクションは頻繁には聞かれず、歌われず、観察のための楽譜も利用できないので、楽節の繰り返しや対照的な楽節による交替が認識できれば十分である³⁰⁾と考えられていた。聴取の授業は、音楽の知的理解を導く知識を獲得する

主要な手段と見なされていないのである。

同様に、雰囲気、旋律、民族性、大作曲家などの学習も、歌曲を通じての学習が中心となっている。聴取の授業が独自に系統的な学習を提供する分野は、*The Music Hour*においては、器楽作品の形式、音楽家や作曲家、楽器や声質などに限られていたのである。*The Music Hour*の聴取の授業の独自の意義は、明確な学習内容を系統的に学習するというよりも、むしろ多様な標準的作品の聴取の経験を提供する部分に存在したといえる。

3.3.2 聴取者の教育としての音楽鑑賞教育の役割

音楽鑑賞が聴取者の教育であるという言葉のもつ意味が、読譜力や演奏力を要求しないとした20世紀初頭とは変わり始めていることは、注目すべき点である。

学校音楽の教育課程は、大多数の子どもたちが最終的には音楽の演奏者というよりは、聴取者になるのであろうことを認識しなければならない。演奏の才能や願望のある子どもには、あらゆる励ましや機会が提供される一方で、その教育課程はそれでも音楽の鑑賞の側面をしっかりと強調しなければならない³¹⁾。

このように鑑賞の側面が強調されているとはいえ、発展を続ける学校での器楽教育の成果などを受けて、演奏の願望のある子どもにも演奏の技術を身につける機会を与えようとしているのである。そして、*The Music Hour*の音楽鑑賞の教育課程には楽器に関する学習も含まれている。直接に演奏指導を行うことは計画されていないものの、音楽鑑賞領域の学習を通じて演奏の学習への願望が導かれるべきであると考えられた。

ここで提案した(楽器に関する)学習から、ソロや合奏の楽器の音色の非常に高められた鑑賞力のみが現れるばかりでなく、楽器への関心もまた現れるべきである。その関心は楽器の演奏を学びたいという願望と学校オーケストラや学校吹奏楽団のメンバーになりたいという願望を導くべきである³²⁾。

すなわち、音楽鑑賞の教育課程は演奏への願望を養い、願望がある生徒は演奏を学ぶ機会が与えられるべきである、と考えられているのである。聴取者の教育という音楽鑑賞教育の導入期に基盤とした位置づけこそ残っているものの、初等学校音楽科は演奏など自己表現を重視する方向にその目的をシフトしており、音楽鑑賞の教育課程においても、実際には純粋に鑑賞力育成を最終的目的としなくなっていた。

同様に、かつては必要要件とされていなかった読譜能力に関しても、もはや必要ないものとは考えられていない。

音楽鑑賞力は、蓄音機のレコードで利用可能な器楽や声楽の名作から主題を学習することによって促進される。ある場合には、そのセレクションがかけられている間に、これらの主題が歌われるか、ハミングされるであろう。別の場合には、生徒たちはその作品を聴きながら主題の楽譜を追うであろう。この方法によって、その主題の明確な印象が得られる³³⁾。

これは、歌唱の教育課程で読譜指導に用いられるStudy Songsの説明の一部である。教科書に含まれる器楽の名作の主題も読譜の教材同様に歌われるのであり、そのためには最低限度の読譜能力が必要とされていた。

3.3.3 *The Music Hour*における鑑賞と聴取の用語法

先に簡単に触れたように、*The Music Hour*では厳密に鑑賞と聴取が使い分けられている。音楽鑑賞という言葉は、「生徒がより知的により楽しんで音楽に参加することの役に立つよう計画された多様な活動すべてに、どちらかといえばゆるやかに適用される」³⁴⁾ものであった。それに対して、聴取は音楽科の諸活動の中で他の活動とは異なる独特の位置を占める。

これらの活動(読譜や歌唱)は最高に重要であったし、最高に重要である。しかし、今日のカリキュラムには、ただ歌唱や音楽作りの分野での自己表現を通じたものだけでなく、蓄音機、ラジオ、コンサートへの出席などの聴取の分野の音楽鑑賞のための場も見い出されなくてはならない³⁵⁾。

ここで聴取として想定されているものが、静かな聴取である。*The Music Hour*に鑑賞と聴取の間の混乱は存在しないが、聴取に関しては聴取プログラムと静かな聴取という2つの用法がある。実際には、従来の鑑賞の授業と聴取の授業の混乱した関係性は、*The Music Hour*で使い分けられている聴取プログラムと静かな聴取の関係に近いものである。*The Music Hour*の教育課程の項目に含まれる聴取とは、厳密には静かな聴取を指している。

聴取プログラムは、リズム遊びの直接的な身体的活動から美しい雰囲気への内に秘めた反応までの様々な諸経験を包含する。…静かな聴取は、誰かの印象を描写した、あるいは議論した思想に左右されない

音楽鑑賞の経験、すなわち美しい音楽が与える喜びを求める聴取の重要な側面として認識されなければならない³⁶⁾。

実際には聴取プログラムの中心は静かな聴取、すなわち聴取の授業であった。*The Music Hour* では、歌唱力育成と読譜を除いたほとんどの活動が音楽鑑賞の教育課程に含まれる。聴取プログラムは、そのうちの実際に音楽が用いられる場面すべてと関係する。そして、蓄音機、ラジオ、コンサートなどの音楽を聴取する活動は、静かな聴取として区別され、初等学校音楽科に明確に位置づけられている³⁷⁾。聴取の授業では、教材曲を聴取し、主題、楽器、雰囲気、リズム、物語や描写、様式、などについて子どもに気づかせることが意図された³⁸⁾。聴取の授業で扱われる中心は標準的な作品、すなわち、民謡、クラシックの名作、現代の一流の作曲家の歌曲、などであった。子どもが「標準的な英文学作品の学習のように、文化的発達の背景として偉大な音楽の名作を知る」³⁹⁾ ことが、音楽鑑賞の教育課程で意図されていたのである。

3.3.4 歌唱と鑑賞の教育課程の一体化

このように聴取の授業が教育課程の中に明確に位置づけられているにもかかわらず、*The Music Hour* では子どもの活動を中心に教育課程が統合されるのであり、中等教育段階における学校教育への音楽鑑賞教育の導入以来一般的であった、独立した鑑賞の授業という位置づけは完全に否定されている⁴⁰⁾。

この（音楽鑑賞）プログラムは、子どもの音楽的発達の総体が、統合された経験となるように計画されたのであり、別々の授業の連続ではない。歌唱と鑑賞の授業は融合し、歌曲と器楽セレクションは1日を通じて、音楽の授業以外の学校や家庭での多様な経験に貢献するという点で、役立つ場所を見い出す。このように子どもたちの歌唱と聴取の経験の結びつけることで、すべての音楽の統合された概念が作り上げられるであろう⁴¹⁾。

上述のように、理念上は独立した聴取の授業は存在しないことになっている。例示された日案などにもその考えが徹底されているかを確認するために、聴取の活動が存在する日の日案を抜き出しすべての活動を提示したのが表4である。

表4のとおり、実際にほとんどの場合聴取の授業は授業に部分的に含まれている。第4学年11月第3週水曜日は、例外的にすべての授業が聴取の項目で構成されている。ただし、これは音楽家の学習や楽器の学習

表4 日案の例における音楽の授業の構成と聴取の授業

第4学年 11月				
第1週 月曜日	第2週 月曜日	第3週 水曜日		
声の学習：中立シラブルによる愛唱歌の母音唱 暗唱歌：＜終戦記念日のパレード＞ 静かな聴取：＜白鳥＞、サン＝サーンス	声の学習：歌か主題の母音唱 暗唱歌：＜詩篇 100番＞＜感謝の賛歌＞ 静かな聴取：＜未完成交響曲＞第1楽章、シューベルト	ヴァイオリンの復習：音質 学習：チェロの音質 レコード：＜未完成交響曲＞、カザルスの演奏する典型的なチェロの録音、クライスラーの演奏するヴァイオリンの録音		
第6学年 11月				
第1週 水曜日	第1週 金曜日	第2週 水曜日	第3週 水曜日	第4週 月曜日
暗唱歌：＜遊ぶ木の葉＞ 主題：＜新世界＞交響曲より 議論：イングリッシュホルン 聴取：＜新世界＞交響曲よりラルゴ、ドヴォルザーク	音の混合 Reading Song：＜收穫賛歌＞ 主題：＜新世界＞交響曲より インディアン 議論：イングリッシュホルン 聴取（インディアン）：＜水青き国より＞、カドマン	復習：＜貴重な眠り＞ 記憶：＜收穫賛歌＞ インディアン 聴取：＜新世界＞交響曲よりラルゴ、ドヴォルザーク	復習：＜バラの木＞ 復習：＜サンタ・ルチア＞ 復習：＜ビルグリム・フェアーズ＞ 聴取：＜ワルツ イ短調＞、ブラーム	音の混合 復習：＜ホップの植え付け＞ 記憶：＜收穫祭＞ 聴取：＜新世界＞交響曲よりラルゴ、＜ワルツ イ短調＞、ブラーム

(*The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, pp. 8-9, *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, pp. 10-12より作成。ただし■は聴取の項目を示しており、筆者による。)

とも並行しているため、分類法によっては聴取だけで構成されていないとも考えうる。聴取の授業は概ね週1回程度用意されているが、聴取の授業の時間は週1回の授業に相当する時間数を割り込んでいる。しかしながら、音楽鑑賞の教育課程が聴取以外の活動も含むことを踏まえれば、週1回の授業相当の時間数は確保されているといえる。とりわけ、歌曲の復習等を鑑賞の教育課程の「美しい歌の美しい歌唱」であると見なせば、かなりの時間は音楽鑑賞の教育課程に配分される扱いである。鑑賞の教育課程の学習内容の多くが実際には歌唱を中心として学習されるものであったこともあり、聴取の授業の時間数自体は、1920年代に要求されていた時間数よりもやや少なくなっている。

4. *The Music Hour* における音楽鑑賞の教育課程の位置づけ

The Music Hour では歌唱と鑑賞の2つの教育課程で音楽科の授業が構想されていたが、歌唱の教育課程であるか鑑賞の教育課程であるかを問わず、それぞれの授業は子どもの活動を軸に構成された。鑑賞の教育課程も子どもの活動を基準として学習項目が設定され、その結果、音楽鑑賞教育の聴取という活動の側面、とりわけ「静かな聴取」を指すものが聴取であるとす

る、鑑賞と聴取の授業の関係性が示された。音楽鑑賞教育は歌唱を通じたものが中心であり、聴取の授業は標準的なセクションの学習の時間であると考えられた。その時間は、音楽作品の中でも主として器楽作品を経験する時間として位置づけられた。そして音楽鑑賞教育の目的も、従来の聴取者の教育という役割を超え、子どもの生活に役立つことや、学習が自己表現へ通じることなどを目的とすることとなった。音楽鑑賞力育成という目標こそ維持されているものの、*The Music Hour*では子どもの多方面の音楽能力を伸ばすことへと音楽科の目的の重点が移り始めているのである。

従来の歌唱中心の教育課程に加えて音楽鑑賞教育の教育課程を設定し、月案の中に具体的に音楽鑑賞の課程を配した点では、*The Music Hour*は斬新であった。*The Universal School Music Series*においても*Music Education Series*においても、教科書指導書では音楽鑑賞の教育課程は多かれ少なかれ歌唱の指導に関する部分と分離した形で提示されるに留まっており、正課である歌唱を中心とした教育課程での聴取の授業の扱いは*The Music Hour*以上に不明確であった。*The Music Hour*は、聴取の授業の独自性の主張やその意義づけの明確さでは先行した音楽鑑賞指導書に劣るものの、音楽科に音楽鑑賞教育を明確に規定した教科書双書として、音楽鑑賞教育の初等学校教育への定着に貢献したといえる。

5. おわりに

以上のように、本稿では鑑賞と聴取という言葉の使い分けに着目して1920年代の初等学校用音楽教科書の音楽鑑賞の教育課程の枠組みを概観し、その特徴及び鑑賞と聴取という言葉の使用法の相違を明確化してきた。その結果、次のようなことが確認できた。第1に、*The Music Hour*以前の音楽教科書では聴取という言葉を用いながらも、リズム活動などの鑑賞力育成に資する活動が含まれているなど2つの言葉の用語法に混乱が見られること、第2に、いずれの教科書も音楽鑑賞力育成を目標としており、特別に設定された鑑賞の教育課程がある場合には、そこでは実質的に聴取の授業よりも幅広い内容を扱っていること、である。すなわち、初等学校では1920年代には既に聴取の授業よりも包括的な音楽鑑賞領域が構想されていたのであるが、鑑賞と聴取の言葉の混乱により、*The Music Hour*以前にはその構想自体が曖昧にされていたのであった。クラシックの標準的セクションの学習である聴取は、音楽鑑賞力育成に資す活動全てを緩やかに包含する教育目的に近い言葉としての鑑賞から区別さ

れたのである。

*The Music Hour*は、教科書としては初めて、音楽鑑賞力育成という目標のために歌唱と鑑賞の教育課程が存在し、鑑賞の教育課程の一部として静かな聴取が存在する、という形で音楽鑑賞と聴取の使い分けを行なった。そのことによって、同教科書は米国の初等学校用音楽教科書で初めて、授業としての音楽鑑賞と聴取の授業との関係を整理することに成功している。*The Music Hour*では、音楽鑑賞プログラムは静かな聴取以外にも音楽鑑賞力育成のための多様な活動を含み、子どもの活動を中心として授業が組織されていた。器楽や創造的表現のカリキュラムははなはだ不十分であったものの、この特徴は5つの活動領域からなる初等学校音楽科への嚆矢となるものであった。子どもの活動によって音楽の授業を組織する、という方法は、音楽鑑賞力を育成するための多様な活動が音楽鑑賞領域に混在していることを意識化させ、結果として音楽鑑賞と聴取の授業の間の混乱にも一定の結論を用意した。

このように、*The Music Hour*の音楽鑑賞の教育課程が聴取の授業以外にも多様な活動で構成されていたことは、1920年代に構想された音楽鑑賞の教育課程にも、実際には聴取の授業以外の様々な活動が含まれていたことを暗示するものである。なぜなら、本稿の冒頭で述べたとおり*The Music Hour*の音楽鑑賞教育が特別に新しいものであると見なされてこなかったからである。実際には聴取の授業と混同されていた初等学校の音楽鑑賞領域の構想を整理し、音楽鑑賞という言葉で包括することから生じる曖昧さを排した点で*The Music Hour*は音楽鑑賞教育の方向性を決定付けたのである。*The Music Hour*では、聴取の授業は、中等教育への音楽鑑賞教育導入時と同様に標準的セクションを学習する時間として独自の位置を占めていた。一方で、音楽鑑賞教育という概念は個別の活動へと分節化され、導入時以来の聴取者の教育という目的は、活動を通じた多方面の音楽能力の伸長へと移行しようとしていたのであった。

【注及び引用文献】

- 1) Birge, E. B. *History of Public School Music in the United States*, MENC, 1966 p. 209
- 2) 例えば*The Universal School Music Series*の*Teacher's Manual*では、「聴取の授業は蓄音機レコードの演奏だけで構成されると理解されるべきではない」(p. 33)と否定的文脈であるが、聴取の授業の含意する領域を示している。ここでは地域の演

- 奏家の演奏なども聴取の授業を構成することを主張するために、上記のような否定形で出現している。
- 3) 荒巻治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房、2001年、276頁、Dunham, R. L., "Music Appreciation in the Public Schools of the United States 1897-1930", Ph. D. dissertation, University of Michigan, 1961, p. 93, Sanz, K. D., "A History of Approach to Teaching Listening in the Elementary Schools as reflected in the Elementary Textbook Series Published from 1900-1990", Ph. D. dissertation, University of Colorado, 1993, p. 47
 - 4) Damrosch, W., G. H. Gartlan and K. W. Gehrken, *The Universal School Music Series Teachers' Book*, Hinds, Hayden & Eldredge, Inc., 1923, p. iii
 - 5) Ibid., pp. 34, 37-41
 - 6) Ibid., pp. 40-41, 133-134
 - 7) Ibid., p. 32
 - 8) Ibid., p. 33
 - 9) Giddings, T. P., W. Earhart, R. L. Baldwin and E. W. Newton, *Music Appreciation in the Schoolroom*, Ginn and Co., 1926, p. 3
 - 10) Ibid., p. 26
 - 11) Giddings, T. P., W. Earhart, R. L. Baldwin and E. W. Newton, *Music Education Series the Teachers' Book*, Ginn and Co., 1931, p. 91
 - 12) Ibid.
 - 13) Giddings, T. P., W. Earhart, R. L. Baldwin and E. W. Newton, *Music Education Series Outlines*, Ginn and Co., 1930, pp. 345-353
 - 14) Foresman, R., *Manual to Accompany Books of Songs*, American Book Co., 1927, p. 28
 - 15) Ibid., pp. 28-36
 - 16) McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Elementary Teacher's Book*, Silver, Burdett and Co., 1929, p. iii
 - 17) McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, Silver, Burdett and Co., 1931, p. iii
 - 18) McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Elementary Teacher's Book*, Silver, Burdett and Co., 1929, p. iv
 - 19) McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, Silver, Burdett and Co., 1931, p. iii
 - 20) Ibid.
 - 21) Coffin, L. Report of the Sub-Committee on Music Appreciation for the First Six Grades, *Journal of Proceedings of the Music Supervisors National Conference*, 1930, p. 229
 - 22) *The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, p. iii
 - 23) 第6学年で1箇所だけ創造的表現が挙げられているが、旋律を完成させる程度のものであり、独立した領域として成立していないため歌唱領域に含めた。
 - 24) McWhood, L. B., Music in College and Secondary School, *Papers and Proceedings of the Music Teachers' National Association*, 1906, p. 73
 - 25) *The Music Hour* の著者には、音楽鑑賞教育を聴取者の教育であると主張した Birge など、米国における音楽鑑賞教育の先駆者たちが含まれている。
 - 26) Educational Committee, A Standard Course in Music, *Journal of Proceedings of the Music Supervisors' National Conference*, 1921, pp. 220-231
 - 27) McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour in the Kindergarten and First Grade*, Silver, Burdett and Co., 1929, p. 194
 - 28) *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, pp. 27-32
 - 29) Ibid., pp. 32-34
 - 30) *The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, pp. 28-29
 - 31) *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, p. 18
 - 32) *The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, p. 36
 - 33) *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, p. 50
 - 34) *The Music Hour Elementary Teacher's Book*, p. 13
 - 35) *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, p. 10
 - 36) *The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, p. 37
 - 37) Ibid., p. 53
 - 38) Ibid.
 - 39) *The Music Hour Elementary Teacher's Book*, p. 16
 - 40) 高等学校に導入された音楽鑑賞は、単位が認定されるかどうかは学校ごとに異なるとはいえ独立した科目であった。MSNC 音楽鑑賞委員会が1930年に音楽の授業のうち週1回の授業時間を要求していたことは先に触れた。
 - 41) Ibid., p. 34

【文 献】

- 荒卷治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房、2001年
- Birge, E. B. *History of Public School Music in the United States*, MENC, 1966
- Coffin, L. Report of the Sub-Committee on Music Appreciation for the First Six Grades, *Journal of Proceedings of the Music Supervisors National Conference*, 1930, pp. 229-245
- Damrosch, W., G. H. Gartlan and K. W. Gehrkins, *The Universal School Music Series Teachers' Book*, Hinds, Hayden & Eldredge, Inc., 1923
- Dunham, R. L., "Music Appreciation in the Public Schools of the United States 1897-1930", Ph. D. dissertation, University of Michigan, 1961
- Educational Committee, A Standard Course in Music, *Journal of Proceedings of the Music Supervisors' National Conference*, 1921, pp. 220-231
- Foresman, R., *Manual to Accompany Books of Songs*, American Book Co., 1927
- Giddings, T. P., W. Earhart, R. L. Baldwin and E. W. Newton, *Music Appreciation in the Schoolroom*, Ginn and Co., 1926
- Giddings, T. P., W. Earhart, R. L. Baldwin and E. W. Newton, *Music Education Series Outlines*, Ginn and Co., 1930
- Giddings, T. P., W. Earhart, R. L. Baldwin and E. W. Newton, *Music Education Series the Teachers' Book*, Ginn and Co., 1931
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour First Book*, Silver, Burdett and Co., 1927
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Second Book*, Silver, Burdett and Co., 1928
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Elementary Teacher's Book*, Silver, Burdett and Co., 1929
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Fourth Book*, Silver, Burdett and Co., 1929
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour in the Kindergarten and First Grade*, Silver, Burdett and Co., 1929
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Third Book*, Silver, Burdett and Co., 1929
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Fifth Book*, Silver, Burdett and Co., 1930
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Intermediate Teacher's Book*, Silver, Burdett and Co., 1931
- McConathy, O., W. O. Miessner, E. B. Birge and M. E. Bray, *The Music Hour Teacher's Guide for the Fifth Book*, Silver, Burdett and Co., 1931
- McWhood, L. B., Music in College and Secondary School, *Papers and Proceedings of the Music Teachers' National Association*, 1906, pp. 70-75
- Sanz, K. D., "A History of Approach to Teaching Listening in the Elementary Schools as reflected in the Elementary Textbook Series Published from 1900-1990", Ph. D. dissertation, University of Colorado, 1993
- 武内裕明「米国の中等教育における初期の音楽鑑賞教育課程に関する研究」『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第53巻，中国四国教育学会，2007年，578-583頁